



テレマカシー

2004.10.15 発行 第2号

季節は秋たけなわ。

皆様いかがお過ごしでしょうか。
今回より通信名を「テレマカシー」と致しました。
末永くよろしくお願ひ致します。

ひばりクリニック
高橋 昭彦



これぞ秋の味覚

JR宇都宮駅前から西に伸びる通りは、大谷（おおや）石で有名な地区を通るため、大谷街道と呼ばれています。この大谷街道をどこまでもまっすぐ行くと、やがて道は緩やかなカーブを描いて北西に進路を変え、古賀志という地域にはいります。古賀志山はパラグライダーを楽しむ人が多く、青い空に色とりどりのグライダーが舞います。街道沿いには何軒かの果樹園があります。

道端の販売店に立ち寄り、梨を買いました。たくさん入って一袋500円。形がやや歪んだりしているので一般的の市場には出ないものですが、食べる分には全く問題ありません。早速皮をむいていただきますと、口の中に豊水のみずみずしさがじわーっと広がります。豊水とはよく言ったものだと感心しつつ。

今年は夏が暑かったこと也有って梨に限らず、果物は甘いです。栃木がりんご、梨、ぶどうなどの産地であることは意外に知られていませんが、外回りをしていると、あちらこちらで素敵な果物に出会えます。秋の楽しみの1つです。

*通信タイトル～テレマカシーとは？

“Terima Kasih” インドネシア語で感謝を表す言葉。現地では「トゥリマ カシー」に近い発音だそうですが、“Terima”は「受ける” “Kasih”は「慈悲、慈愛」。慈悲、慈愛を受けることが「ありがとう」という意味になります。在宅ホスピスケアに関わらせていただいた方が最期にご家族に残された素敵な言葉です。

「彼らも今まで良いと思っている人はそう多くないはずです」 ホームレスと人権 一川崎市の取り組みー

平成6年6月、ホームレスの人々が、川崎市役所に大挙して訪れました。とにかく、食べるものがないので何とかしてほしい、という悲痛な声を聞いて、生きていくために最低限の支援は人道的に必要だと感じた当時の課長、石野厚さんが「よし、パン券を配ろう！」と決定したのでした。しかし社会の目は厳しく、「働きもしないのに」「街を汚す」「我が物顔で公園で体を洗う」「なぜ自分たちの税金が彼らにいくのか」などの批判も少なくありませんでした。その夏、石野さんたちはパン券を発行することに黙々と汗を流し、やがて市役所内外での理解も得られるようになりました。お腹が満たされたホームレスの人たちは次第に落ち着き、体の調子も良くなってきたましたが、住まいや仕事がない状態は変わらず、川崎駅前に暮らす人たちは増え続け、中には子どもたちから石を投げられたり、暴行、放火などの被害に遭う人も出てきたのです。

平成14年8月、ホームレスの人たちを支援する法律（ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法）が出来ました。そこで川崎市では、彼らが泊まったり立ち寄って身をきれいにできる施設を作ろうと考えました。これは地域の中に彼らの受け皿が必要だ、と感じていた石野さんたちにとっては長年の悲願でした。しかし、みんな必要だと理解はしてくれるのですが、自分の地域にはご免だというのです。総論賛成、各論反対です。地元からは猛烈な反対運動が起きましたが、石野さんたちは住民を対象に粘り強く説明会を繰り返し、ようやく16年度からのオープンにこぎつけました。

こうして出来たのが川崎市ホームレス緊急一時宿泊施設「愛生寮」です。泊まりは定員250人で午後6時から翌朝6時まで利用でき、朝ご飯と昼食相当のお弁当が付きます。昼間には1時間単位で立ち寄ってシャワーや洗濯、理髪、古着の提供を受けられます（いずれも無料）。

ここにもうひとつの試みがあります。利用する人に呼びかけてボランティア登録をしてもらうのです。彼らが食堂の手伝いや布団干し、ご近所の掃除などをするとポイントがもらえ、そのポイントが貯まると協力してくれる商店で買い物ができる仕組みです。この活動が住民の理解を得るきっかけにもなっているのです。

活動をする際には写真つきの名札をつけます。朝6時からご近所の掃除をしていると、今まででは白い目で見られがちだった彼らに対して「おはようございます。毎日ご苦労様ですね」とご近所の人々から声がかかります。「本当に一生懸命やっていただいています」と石野さん。

ホームレスの身なりが汚いのは長い間街頭で生活してきた結果であって、彼らの人格とは無関係です。愛生寮を利用することで、栄養と休息が取れて体もきれいになります。ボランティア活動を行うと元気が出できます。愛生寮ができてからは駅周辺のホームレスは激減し、環境も良くなりました。愛生寮の利用者が地域住民と問題を起こしたことはまだ一度もないそうです。ただ、排除するだけでなく、受け皿づくりから始めた川崎市の取り組みは、高い評価を受けています。

「川崎市はホームレスの皆さんにとって住みやすいのでは？」という質問には、「集まりやすいのでしょうかね」と石野さんは優しく答えます。彼らの生活づくり、自立支援への道はそう簡単なものではありませんが、取り組みを続けていくことで、大方の方が数年後にはそれぞれの良い方向へ向かうと石野さんは信じています。「彼らも今まで良いと思っている人はそう多くないはずです」という彼の言葉に熱い想いを感じたのは私だけではないと思います。石野さんは、現在、川崎市の収入役になっておられます。

(16年8月 ソーシャル・インクルージョン研究会より)

人工呼吸器をつけた子どもたち

3歳になった尊（たける）君が退院したのは7月。生まれて初めて過ごす我が家で、ご両親との暮らし始まりました。尊君は生まれた時に脳に十分な酸素が届かない障害があり、人工呼吸器がつけられています。喉には穴があけられ、呼吸をするための気管チューブが入っています。窓から木が見える明るい部屋に響く人工呼吸器の規則正しい音が寝息の代わりです。痰を取るとき、鼻の管から流動食やお茶を入れるとき、オムツを替えるとき、お母さんはいつも尊君に声をかけます。

ベッドの横にはサービス調整役の保健師が作ったノートがあり、尊君に関わる人々が情報を共有しています。サービスを利用することでいろいろな機会が増えました。月に1度の大学病院の受診にはお母さんとヘルパーで行くようになり、受診のたびに休みを取っていたお父さんの負担が減りました。訪問看護のときに外出ができたことで、お母さんは歯の治療が無事に終わりました。

尊君に少し変化が現れました。養護学校から就学前訪問にやってきた先生が楽器を鳴らしたら、その音に反応したかのように尊君がうなずいたのです。キーボード持参で訪れたホームヘルパーが曲を弾きながら歌いますと、ウンウンとうなずくような動作がありました。「ヘルパーさんが帰られたあと、しばらく泣いてしまって」とお母さん。まだ何ともいえませんが、ひょっとすると「嬉しさ」や「楽しさ」の表れかも知れません。

成長は楽しみですが、人工呼吸器をつけた子どもの介護は厳しいものです。尊君の足の指には酸素のセンサーがつけられていて、呼吸状態が悪化したときや泣いて動いたときはアラームが鳴ります。お母さんはその度に確認し、元気に泣いているときはトントンとあやします。痰が絡んでいる時は、吸引器のスイッチを入れて、細い管をそっと穴から気管まで入れて痰を取ります。管を外している間は呼吸が止まっていますから、この動作は数十秒の間に終わらねばなりません。これが



「吸引」と呼ばれる行為です。吸引を適切にやらないと痰が詰まってしまい、最悪の場合には窒息してしまうことになります。アラームの助けを借りつつ実際の顔色や呼吸音を確認して、必要な時はいつでも吸引ができる体制が必要なのです。

吸引は「医療的ケア」と呼ばれる行為の1つであるため、介護職には通常は認められていません。このためホームヘルパーが訪問しても家族は外出することができませんし、数時間預かってもらうデイサービスや、1日単位で預かってもらう短期入所は、「医療的ケア」を理由にほとんど利用ができないか、親の同伴を求められます。このため、在宅では家族がつきっきりになってしまいます。

尊君は何か不快なことがあるといつでも泣いてお母さんを呼びます。それはそれで親子関係としては好ましいことなのですが、眠くても疲れていてもアラームが鳴ればお母さんは心配で見に行きます。ある夜、ついにお母さんはダウントしまいかつぱんに代わってもらいました。でもお父さんにも翌朝には仕事があります。元気な子どもの夜泣きとは違うのです。これが辛い。

アラームが鳴らない夜が欲しい、そんなとき、誰かに見てもらって心と体を癒すことができる、そんなサービスがぜひとも必要です。中には下の兄弟の出産時に預かってもらう所が決まらず苦労したという話も聞きます。重度で医療的ケアが必要な障害児や障害者に、最も必要で最も欠けているのが安心して預けられるお泊まりケア—短期入所です。県内には、「バクバクの会」という人工呼吸器をつけた子どもと親の全国組織の支部があり、ご家族同士の情報交換や支援をしながら、短期入所の充実を求める活動を行っています。

私もできる限りの支援をしたいと思っています。「朝までぐっすり休みたい」、「次の子を産みたい」・・・人は誰でも希望していいはずですから。

ひばりクリニックはユニセフの活動を支援しています。

第1号でご紹介したひばりクリニックのユニセフ募金箱「ねずみくん」に、こんな嬉しいお便りが届きました。

お名前がわからず、未だにお礼の一言も言えないままであります、スタッフ一同、心より感謝しております。

この場をおかりして深くお礼申し上げます。あたたかいお気持ち本当にありがとうございました。

ここにちゅ、ユニセフのねずみくん。

ほくは猫のニャニャコです。

君のこと、ひばりクリニック通信で知ったの。

君、とってもかわいいね～。

一度、会いたいな。

(ほくの大好きなヨーグルトを我慢して貯金した
おこづかいを少しだけ送ってもらおう。

ねずみくん 今年はとても暑いね

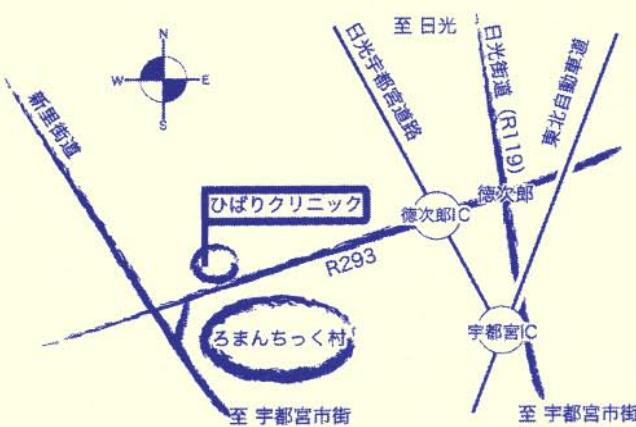
君もほくもを皮膚から熱中症に気をつけよう。



新潟集中豪雨水害のボランティア活動支援金については、クリニックご利用者など多数の方から温かいご支援をいただきました。とちぎボランティアネットワークを通じて、総額16,077円を現地のボランティア支援のためにお渡しいたしました。ご協力ありがとうございました。

「ひばりクリニック」のご案内

栃木県宇都宮市の北西部、新里町（にっさとまち）にある、ログハウス風の小さな診療所です。2002年5月に開業しました。



〒321-2118

栃木県宇都宮市新里町丙 357-14

電話 028-665-8890

FAX 028-665-8899

E-mail hibari-clinic-01@theia.ocn.ne.jp

診療時間	月	火	水	木	金	土
9:00～ 12:00	○	○	休	○	訪問 診療	○
午 後 (在宅医療)	訪 問	訪 問	診	訪 問		訪 問

この通信は、子どもから大人まで、障害のある人もない人もどんな人も社会から排除されることなく、地域で一緒に生きていく世の中を目指して、ひばりクリニックが企画・編集しております。この通信についてのご意見・ご感想はひばりクリニックまでお寄せください。

<ひばりクリニックの運営理念>

1. 在宅で過ごされるご利用者に出前の医療を提供すること
2. 子どもからお年寄りまで診る家庭医の機能を提供すること
3. 障害児・者やお年寄りの生活を支える市民活動を支援すること